

全国審査員からひとこと



教室の学習

日常生活の実体験に基づく「新しい気づき」は子供たちの生きるエネルギーや成長に不可欠であるとともに個々の子供たちに固有の異なる体験でもあります。

「教室の学習」は多様多彩であるそれらの体験をクローズアップして、独自の表現に展開する場です。教室全体への指示と個々の自由な発想の羽ばたきが適切に調和したときに魅力的で鮮烈な作品が生まれます。

そのような作品群に出会うことが審査しているときの醍醐味でもあります。



玉川 信一 (全国教育美術展担当理事、筑波大学名誉教授)

集団の中での「自分」を感じる4歳児

全国教育美術展最年少の4歳児は、集団の中での「自分」の存在を感じるようになる時期です。クラスみんなで心を動かした活動がモチーフとして意味を持ち始めるこの時期、ささやかだけれど、線に込められた一人一人のその初々しい思いを丁寧に受け止めることでのびやかな表現を育み、その子の将来を支える独自のものの見方、感じ方が育っていくのだと思います。性急に描かせようとする4歳児の描画が多い中、クラスでのあたたかい会話が聞こえてくるような作品にも出会うことができました。



伊藤 裕子 (学校法人裕学園 谷戸幼稚園 園長)

思うがままに表現する喜びと指導者

描きたいことを自分の思い通りに描くという喜びは、自分に対する意識の広がりや深まりを与えてくれます。それはまた、自分で考えることの大切さを体験的に学ぶことでもあります。そのような学びに必要な指導とは、子どもたちが自ら表現の主題と方法を考える機会を大切に、寄り添い、思うがままに表現する喜びを分かち合うことだと思います。今回の審査でも、子どもと指導者のよき関係から生まれた生き生きとした多くの作品に出会うことができました。



大坪 圭輔 (武蔵野美術大学 教授)

主体的表現であることの価値を伝える

子どもたちの作品に今ひとつ元気がない。現在、子どもたちにとって絵を描くということが自身の思いを主張できる場として成立しているのだろうか。題材のマンネリ化、VRや高解像度でリアルな視覚環境の普及、環境から与えられた没入感、AIの扱いも話題の社会ですが、子どもたちが描くということ、その作品は、個々人が主体的に発想や構想をもとに実験を繰り返して導き出した「自信を持つべき成果」であることを彼ら自身にも理解させたい。また自身の生きている生活環境や社会問題にも目を向けられる意識が題材を通して育まれることも期待します。



加藤 修 (千葉大学 教授)

語りかける作品たち

様々な技法や画材を駆使して描かれた多くの作品が並ぶ全国審査会場はまるでアート畑のようです。その中から、何点かの作品を選んでいかねばならない。多様で豊かな作品が多いから、最終的には、作品と私の対話で選ぶことになります。一つのテーマに向かって描き込んだ作品には、その真っ直ぐな集中力や技法の巧緻性にも惹かれるし、テーマ性や技法も見えない作品にも、そのタッチの力強さや圧倒的な生命力に心揺さぶられます。

迷う。しかし、その迷いは楽しい。生きている生命が教育美術展にあることに希望を感じます。



金子 光史 (アート工房「フェース of ワンダー」代表)

自分の世界を広げる大切な時間

自分の想いや感情が、色や形で画面上に実現化されることは子どもにとって大きな喜びです。また描く過程で感じる戸惑いや想定外の色や形との出会いは、自分を知り、自分の世界を広げる機会となっていると思います。そう考えると、作品一枚一枚の絵が仕上がるまでの時間の中には、子どもたちの貴重な経験がたくさん詰まっている、と思いました。教育、保育現場では目の前の子どもを理解していく場としても、描画の時間を大切にしてほしいと思います。



栗山 誠 (関西学院大学 教授)

自分の思いを伝える挑戦

思いを込めることは、自分を信じる気持ちを引き出します。思いを伝えることは、自分の本音と対話することであり、無力感から脱出し自己有用感を高めます。想いは、イメージを立ち上げ思考が働きます。諸感覚を磨き体の感性を取り戻す試みは、自尊感情の気持ちを引き出します。小さな成功体験が歓喜になり、うまくいかないことも自分の一部であるという自己理解・自己開示にもなります。失敗の恐れを解きほぐすには、思いを伝える挑戦をすることです。



石丸 良成 (東京造形大学 非常勤講師)

絵は、尊い時間の集積

幼児の部門を担当しました。パスを動かす心地よさ、筆を握る喜びに満ち溢れた作品に、「生」の力強さを感じました。人は、文字でやりとりをする以前から、描き、歌い、踊り、音を奏で、さまざまな表現を広げてきました。なかでも描くことは、自分や周囲の人と、そして、描かれた世界と／でお話することでもあり、その子の見方や考え方の素地をたがやすかけがえのない時間です。そんな尊い時間の集積が子どもの絵なのです。

心してゆっくりじっくり向きあいたいものです。



郡司 明子 (群馬大学 教授)

「豊かな感性」を育む

その子にしか描けない伸びやかな線、生き生きとした色遣いや構図は、生命力にあふれ、輝きます。そして、そこからその子のつぶやきや思いが感じられ、ずっとその作品を眺めていたいと思わせてくれます。子どもたちの「豊かな感性」を育むために、その子自身が自分の思いに対して考える場をもつこと、私たちが子どもたち一人一人の感じ方や思いにしっかりと向き合うことが大事なのだと思います。きっとその子の力はあらゆる方向に伸びていくはずですよ。



小泉 憲明 (静岡県静岡市立賤機中小学校 校長)

自分の身体で感じることを大切に

自分が感じ取ったことを、自分なりの表し方を工夫して表している作品は、魅力があります。今は、簡単に情報が手に入る時代です。だからこそ、自分の身体で感じ取ることを大切に、表現につなげてほしいと思います。例えば、画像を見て森の色はわかって、木の香り、鳥のさえずり、小川のせせらぎ、風の音を感じることはできません。子供が感性や想像力を働かせて表現できるよう、先生方のご指導をお願いいたします。教育美術展への取組が、子供たちの生きる力につながることを願っています。



小林 恭代（国立教育政策研究所 教育課程調査官）

一枚の画用紙に広がる世界

今回、初めて全国教育美術展の全国審査に参加させていただきました。子どもたちの絵からは、どんな体験をして、どんな思いで、どんなやり取りを先生として描いたのかなど、色んな背景がうかがえ楽しく見させてもらいました。一枚の画用紙の中に、一人一人の個性が輝き、楽しく造形活動した軌跡がうかがえる。改めて「図工って楽しいな」と思いました。

これからも、喜びを感じながらのびのび描いてほしいと思います。



高橋 有紀子（大分県大分市立鶴崎小学校 教諭）

全ての子に目を向けた教育美術を

素晴らしい作品に出会えとても幸せでした。夢中で表現している子を思い浮かべながら審査いたしました。どんな先生のどんな授業を受けてこの絵が生まれたのかとても気になりました。

私の研究テーマは「図工・美術嫌いをつくりたくない教育」です。現場にいた時からの課題で大学でも美術は絵をうまくかかせる教科という学生たちにそれよりも重要な事柄があることを理解させるように努めています。得意な子だけでなく全ての子にとって充実した楽しい授業の実践、教育美術を大いに期待します。



降籟 孝（山形大学 教授）

描くことは出会うこと

毎年、作品を前に、画材とその技法、支持体（画用紙等の性質や状態）によって表現が「導かれている」ことを実感します。

描き手もまた描くことによって導かれていて、それぞれに自らの思惑を超えてささやかな未知の世界に出会っているのだと思います。

出会った喜びや驚きが作品に垣間見えるとき、私は作者のまなざしと息遣いを感じ幸せな気分になります。



仏山 輝美（筑波大学 芸術系教授）

豊かな感性あふれる作品との出会い

子どもたちの、いま、そのときにしか描くことができない貴重な作品の数々と、審査の場を通して出会うことができました。ふだんの学校生活の様子が伝わるような作品や、想像の世界を豊かにふくらませて色とりどりに表現した作品などが印象的でした。こうした子どもたちのすばらしい表現活動はまさに、学校や家庭での学びから生まれているものだと思います。今後もそれぞれの感性を大切に育んでほしいと感じました。



高橋 由香（NHK 第1制作センター 教育・次世代 チーフ・ディレクター）

心で感じて表現する子ども

子どもは、自然に描いて、心で感じていることを表現します。描くことは、子どもにとって特別なことではなく、とても自然な事です。そんな子どもの絵を見ると、日々の生活で忘れてしまいがちな、心で感じる感性の大切さが思い出されます。

すべての子どもが表現者として自然に描く姿、それは人間が人間として生きていく本来の姿なのです。大人になっても大切な心を忘れないように、永久に守っていききたいと思います。



照沼 晃子（関東学院大学 教授）

何かが変わりはじめている

めまぐるしく更新されるデジタル視覚情報が造形教育に影響を与えることは想像に難くありません。今回も一般的な題材における子どもの着想や発想展開にその片鱗を感じたことや、デジタルビジュアルの造形要素を埋め込んだ題材設定が想定される活動とも出会いました。もちろん、本展覧会の総括をICTの視点だけに着目するつもりはありません。ただ、美術教育は何かが変わり始めているという胸騒ぎを感じた審査会でした。



堀井 武彦（お茶の水女子大学附属小学校 教諭）

子供自らが語りたくなる作品を

全国の子供たちの作品を目の当たりにしてそれぞれの地方の子供たちの生活の様子、想い、息づかいが感じられ、うれしくなりました。子供たちが思わず語りたくなる作品がそこにはありました。子供一人一人が試行錯誤しながら題材や表し方をきめ、作品をつくり出しアウトプットしていく、そこから物語が生まれ自分の世界が広がります。人としての自己実現への一助のため、これからもそっと寄り添っていきたくです。



堀江 昌代（茨城県水戸市立石川小学校 校長）

一枚の絵の向こうに

体全体で感じて描いたのびやかな線、楽しい色づかいや素敵な色の組み合わせ、夢中になって活動する姿が目浮かんでくるような作品にたくさん出会えました。なかでも、各地域の魅力やそこにある生活、空気感が伝わる作品、生き生きとした子どもの眼を通して描かれる表現に心が引き寄せられました。

同時に、一人一人の感じたものや表したいこと、生まれる思い等を丁寧にみとり、すくいとる教師の眼も鍛えなければと思いました。



西井 恵美子（和歌山県和歌山市立雑賀小学校 教諭）

「表したいこと」を見付ける

今年も、素晴らしい作品と出会うことができました。「どんなことを感じたり考えたりして描いたのかな」と思いながら作品を見させていただきました。それぞれの作品から、自分の身のまわりの出来事や自然の美しさ、考えたことや想像したことなどを基に発想や構想をし、形や色彩の特徴や美しさなどを大切にしながら創意工夫した姿が伝わってきました。

これからも、表したいことを見付けて自分の力を発揮してほしいと思います。



平田 朝一（国立教育政策研究所 教育課程調査官）

子どもの創造力のたかまりを

今年も表現意欲のみならず多くの作品に出会いました。これだけ情熱を注いで制作する熱い思いはどこから生まれるのだろう。

ローウェンフェルドの子どもの成長と表現の分類にあるように、13歳以後は「写实的には描けるようにはなるが、創造的な表現には行き詰まりが生まれ、絵を描くことへの興味を失い遠ざかる」ということにならないよう、図画工作と美術の連携をさらに進め、創造意欲を高める授業研究と環境づくりで、美術大好き生徒が増えていくことに期待します。



松山 明（大阪芸術大学 特任教授）

子どもたちの絵は語りかけている

「ほくの絵を見て…」 「ここに〇〇があるんだよ」という子どもの声が聞こえてくる作品に惹きつけられました。子どもたちは一枚の絵の中に自分の気持ちを表現しています。その気持ちを共有できる指導者でありたいです。そのため、子どもが絵を描いて持ってきたら、ほめて「これは誰？」 「この線は何か？ 教えて」と聞いたりして、作者とお話してくださるといいと思います。

この審査にあたり先輩から「あなたの審査で一生の宝を手にする子がいるのよ」と言われました。この言葉を胸に一生懸命に審査させていただきました。



門田 真理子（学校法人福山明星学院 福山暁の星小学校 非常勤講師（図画工作科専科））